

# 中国のたまねぎ生産と産地構造(1)

北海道大学大学院 農学研究院 准教授 朴 紅  
北海道大学大学院 農学研究院 教授 坂下 明彦

## 1 はじめに

中国産野菜の日本向け輸出は一九九〇年代から開発輸入型の展開を開始し、山東省を拠点としたものから沿海部を中心に周年的なものに拡大をみせてている。この中で、中国産たまねぎは、それまでのアメリカ、ニュージーランドなどを抜き、輸入のトップシェアーを示すようになつてている。このため、国内生産の圧倒的シェアーを占める北海道の大きな脅威となつてている。しかし、中国の野菜生産に関する統計は近年になつて公表されているものの、たまねぎに関しては何故か把握されておらず、その実態は不透明である。

そこで、二〇一二年十一月に北海道地域農業研究所の調査研究において、中国農業科学院及び中国農業大学等の聞き取り調査を実施し、中国のたまねぎ生産の動向を地域別に把握、その輸出動向を明らかにし、それらデータの提供を行うという基礎的作業を行つた。

今号と次号で、その一部を整理し紹介することとする。

## 2 日本におけるたまねぎの輸入動向

日本での野菜輸入は一九九〇年代から本格化し、現在では二七二万トンにまで拡大し、野菜の自給率を八〇%程度まで引き下げている。このうち生鮮野菜が九一万トン、冷凍野菜が九二二万トンと拮抗している。ここでは比較のために、たまねぎを含むねぎ類の動向も同時にみていく。ねぎ類の輸入も同時期から開始されるが、ほとんどが生鮮による輸入であることが特徴である。

ねぎ類のうち、たまねぎの輸入が先行し(図1)、一九九四年から急増して二〇万トン台になり、三回の山を持つ大きな変動を繰り返しながら、二〇一一年には三七万トンと最高値を記録している。輸入元の特徴は、二〇〇〇年までは、アメリカ、次いでニュージーランドが中心であつたが、それ以降は中国の比率が高まり、二〇一一年には二七万トン、七一%を占め、二位のアメリカの八万トンに大きく水を開けている(図2)。

旧ねぎ(ねぎと「リーキ及び分葱等」とにんにくも一九九〇年前後から輸入が開始されるが、輸入元が当初から中国であり、開発輸入から出発したことが特徴である。旧ねぎは、一九九八年に一萬トンを超えて、増加を続けるが、二〇〇六年の七・八万トンをピークに、現在では五万トン台となつていて。にんにくについても、一九九三年に一萬トンを超え、二〇〇五年には三万トンとなるが、以降減少に転じて二〇一一年には二万トン弱となつていて。ともに、現在のところ頭打ち状態にある。

単価については、たまねぎは一九九〇年代初頭から一貫して、kg

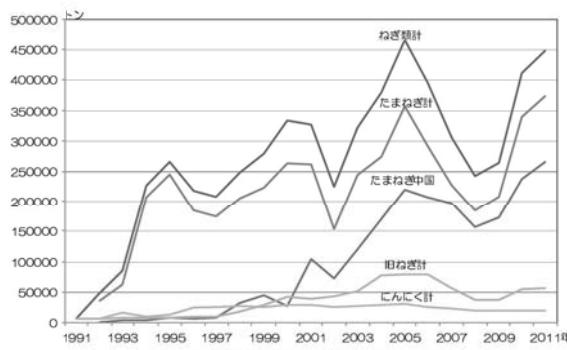


図1 ネギ類野菜の輸入量の動向

注1)『野菜輸入の動向』より作成。

2) 旧ねぎは「ねぎ」と「リーキ・わけぎ等」。

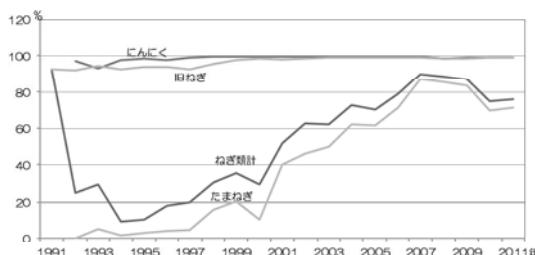
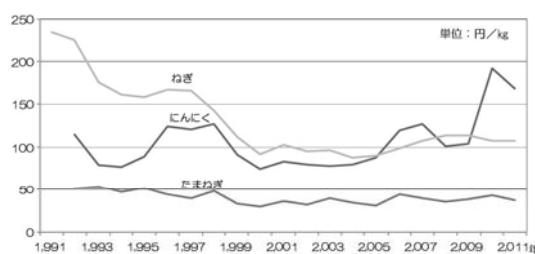
図2 ネギ類野菜の輸入量における中国のシェア一  
注1)『野菜輸入の動向』より作成。

図3 ネギ類野菜の輸入単価の動向

注1)『野菜輸入の動向』より作成。

重要な要素となっている。それに伴い、その生産も拡大しており、外来種であつたたまねぎは今や、アジアが世界の収穫量の六四・三%を占めており、なかでも中国が三〇・四%、日本が三・四%、韓国が二・二%を占めている。

消費量に関しても、FAO (FAOSTAT) の一九九八～二〇〇二年の平均値が最も新しいデータであるが、年間一人当たり供給量では、日本が十一kg、

韓国が一八kg、中国が九kgであり、ニュージーランド（一五kg）、アルゼンチン（十一kg）と並び、伝統野菜ではないにも関わらず高消費国であることがわかる。

### 1) たまねぎの生産の推計

このように中国においても、たまねぎの一人当たり消費量は日本に近い水準に達しており、人口ボリュームの大きさからその生産量も巨大なものとなっている。しかし、中国の農業生産統計は食糧が中心であり、経済作物（加工作物）が加わったものの、野菜はその他に分類されており、その詳細な統計の公表は二〇〇三年になつてからである。しかも、たまねぎはその品目から外されている。ただし、二〇〇九年にはねぎ類合計の統計が公表されたので、以下で試算してみた。

### 3) 中國におけるたまねぎ生産の動向

東アジア（日本、中国、韓国）においては、ねぎ類は古くから地域の食生活に欠かせないねぎ・にんにくと、近代以降急速に消費を拡大させたたまねぎに区分できる。両者は解け合つて現代の食材の

表1 ねぎ類の省別の作付面積(2009年) 単位:千ha、%

地区	面 積				作 付 割 合			
	合計	長ねぎ	にんにく	たまねぎ	合計	長ねぎ	にんにく	たまねぎ
河北	135	57	31	46	7.8	10.5	4.1	11.2
山西	24	17	3	4	1.4	3.0	0.4	1.0
遼寧	31	19	3	8	1.8	3.6	0.4	2.0
吉林	25	16	5	3	1.4	3.0	0.7	0.8
江蘇	182	20	94	67	10.5	3.7	12.2	16.5
安徽	77	28	34	15	4.4	5.1	4.4	3.7
山東	340	81	209	50	19.7	14.9	27.1	12.2
河南	233	94	116	23	13.5	17.2	15.0	5.6
湖北	60	20	31	9	3.5	3.6	4.1	2.3
湖南	40	—	38	2	2.3	—	5.0	0.4
廣東	52	22	21	9	3.0	4.1	2.7	2.1
廣西	49	17	17	15	2.8	3.1	2.2	3.6
四川	80	23	33	24	4.6	4.2	4.3	5.9
貴州	45	15	23	7	2.6	2.7	3.0	1.8
雲南	46	12	23	11	2.7	2.2	3.0	2.7
陝西	56	22	19	15	3.2	4.0	2.5	3.6
甘肅	56	13	9	34	3.3	2.4	1.2	8.4
全国	1,726	546	773	407	100.0	100.0	100.0	100.0

注1)『農村統計年鑑』2010年版による。

2) たまねぎは合計面積から長ねぎ、にんにくを引いて算出。

3) 各作物3%以上の省を表示。

表2 ねぎ類の省別の生産量(2009年) 単位:千トン、%

地区	生 産 量			生 产 割 合				
	合計	長ねぎ	にんにく	たまねぎ	合計	長ねぎ	にんにく	たまねぎ
河北	7,199	3,342	1,335	2,522	13.3	16.1	7.5	16.1
山西	832	653	71	108	1.5	3.1	0.4	0.7
内モンゴル	853	630	120	103	1.6	3.0	0.7	0.7
遼寧	1,691	1,130	113	447	3.1	5.4	0.6	2.9
江蘇	4,658	596	1,912	2,150	8.6	2.9	10.7	13.7
安徽	1,836	785	663	389	3.4	3.8	3.7	2.5
山東	13,397	4,604	5,144	3,649	24.7	22.2	28.7	23.3
河南	8,679	4,065	3,792	822	16.0	19.6	21.2	5.2
湖北	1,545	463	782	300	2.8	2.2	4.4	1.9
湖南	673	—	654	20	1.2	—	3.7	0.1
四川	1,732	535	540	656	3.2	2.6	3.0	4.2
甘肅	1,996	304	173	1,519	3.7	1.5	1.0	9.7
全国	54,317	20,754	17,900	15,664	100.0	100.0	100.0	100.0

注1)『農村統計年鑑』2010年版による。

2) たまねぎは合計面積から長ねぎ、にんにくを引いて算出。

3) 各作物3%以上の省を表示。

アーレを持つ甘肅・河南・四川省を加えると五九・八%となり、产地の中化はかなり進展していると考えられる。たまねぎの生産量は、二〇〇九年単年度であるが、一、五六六万ント、一〇a当たり単収は三・八トントと、各作物3%以上の省を表示。なっている(表2)。生産量ベースでみた省別のシェアは、作付面積のたまねぎ産地の作型と生産量、輸出先などについてヒヤリングを実施した。作付変動が極めて激しいとすることと、一定時点での作付面積を特定することはできなかつたが、いという結果となつた。

しかし、この数値は余りにも心許ないため、今回中国農業科学院で中

ここでは、ねぎ類合計の作付面積からにんにく、ねぎの面積を差し引いてたまねぎの面積とした(表1)。これによると、ねぎ類一七三万haのうち、にんにくが七七万ha(四五%)、長ねぎが五五万ha(三三%)、たまねぎが四一万ha(一二四%)の順となつてある。まさに、巨大产地である。この試算による省別の作付けシェアをみると、たまねぎは、江蘇省(一七%)、山東省(一二%)、河北省(一一%)の三省で四〇%を占めている。これに五%以上のシェ

「足で稼いだ」データであり、信用度は高いと考えられる。

## 2) 中国農業科学院による推計

農業科学院によると、中国におけるたまねぎ生産は日照(短日照・中日照・長日照)によつて三つの地域区分が行われており、春たまねぎ、春夏たまねぎ、秋たまねぎに区分される(表3)。その概要を整理したのが、表4である。これによると、最も面積が大きい

表3 中国たまねぎの地帯別の作型・収量・貯蔵・出荷

地 带	緯度 (北緯)	総作付 面積	作 型			収 量		品 種	出 荷	
			播種	定植	収穫	単収 (t/畝)	玉重量 (kg)		時期	輸出
短日照 (春たまねぎ)	~35度	25~30万畝	8月上旬 ~8月中旬	10月10日前後	3月上旬 ~4月上旬	4~5	200~250	アメリカのセミニス(モンサント買収)、オランダのMuheum	水分が多いので貯蔵は利かない	3~4月 3~4月
中日照 (春夏たまねぎ)	36~39度	130~150万畝	8月下旬 ~9月中旬	11月下旬 ~12月下旬	5月下旬 ~6月中旬	6~7	250~350	タキイ種子の導入後、現在日本10%、韓国0%、中国80%	20日程度、山東・江蘇省では輸出業者が冷蔵庫利用	6~7月 6~8月末
長日照 (秋たまねぎ)	西部	40~45度	70~100万畝	2月下旬 ~3月上旬	4月下旬 ~5月下旬	8月初旬 ~9月中旬	9	スペイン型: アメリカのセミニス、オランダのMuheum・Bejo	雨が降らず、水分も少なく長期貯蔵可能	8~3月 8~3月
	東部						6~7	北海道種中心、札幌黄、カムイ、元帥		

注) 中国農業科学院での聞き取りによる。

表4 中国たまねぎの地帯別の主産地(2011年)

地 帯	省	产 地	面積 万ムー	輸出先	輸出拠点
短日照 (春たまねぎ)	雲南	元謀、建水、陸良	15~20	日本、韓国、インド、ベトナム	雲南(陸路、広西経由海路)
	福建	アモイ、漳州	3~5		
	その他	(広西、廣東、海南)	3		
	計		21~28		
中日照 (春夏たまねぎ)	四川	西昌	10	日本、韓国、東南アジア	雲港(江蘇)、青島(山東)、全国から集荷
	河南	鄭州、開封(新野)	10~15		
	安徽	蚌埠	3~5		
	江蘇	豐県、沛県	25~30		
	山東	濰坊、濟南、青島	30~40		
	河北	邯鄲	5~10		
	山西	太原	3~5		
	陝西	西安一楊凌	4~6		
	甘肅	酒泉、武威、玉門	1		
	その他	(浙江、湖南、湖北)	10		
	計		101~132		
長日照 (秋たまねぎ)	河北	張家口、張北	3~5	日本、韓国 中央アジア	大連 延吉 齊齊哈爾
	内モンゴル	集寧	5~10		
	山西	大同	1~2		
	甘肅	玉門、酒泉、張掖	25~30		
	新疆	南江: 河田、北江: 石河子・伊犁	20~25		
	小計		54~72		
	遼寧	遼陽	3~5		
	吉林	延吉	5~8		
	黒龍江	齐齊哈爾、牡丹江	5~10		
	内モンゴル	ウランチャブ市、赤峰、通遼、商都	10~15		
	小計		23~38		
	計		79~110		
	合 計		201~270		

注) 中国農業科学院での聞き取り及び <http://wenku.baidu.com/view/b4d57cdfad51f01dc281f1bf.html> による。

省別には、前掲表2では、河北、江蘇、山東、河南、広西、甘肅の各省が上位を占めたが、主産地を示した表4によると最も作付の大きいのは、中日照地域の山東省(二~二・七万ha)であり、これだけで日本の作付面積に並ぶ。その後は同じ中日照地域の江蘇省(一・七~二万ha)と長日照地域の甘肅省(同)であり、新疆(長日照地域、一~三~一・七万ha)、雲南(短日照地域、一~一・三万ha)、河南(中日照地域、〇・七~一万ha)、内モンゴル(長日照地域、同)と続いている。以上が一万ha以上の規模の七省であり、全体の六五%程度を占める。三つの作型により南北の幅は大きいが、作型毎の主産省への集中を見ることができる。

以下では、作型ごとの特徴とそれぞれの主産省の実態について見ていくこととする。

(つづく)

のは中日照の春夏たまねぎ(収穫期は五月下旬から六月中旬)であり、作付面積は一三〇~一五〇ha(一haは一五ムー)である。次いで大きいのは

長日照の秋たまねぎであり、作付面積は七〇~一〇〇万ムー、四~七~六・七万haである。産地規模として三番目は短日照地域の春たまねぎであり、作付面積は二五~三〇万ムー、一~七~二万haである。合計面積は一五~一八・七万haとなる。表1に示した推計では四一万haであるから、農業科学院の推計はこの半分以下の八倍近くになる。